

## 身体的魅力ステレオタイプの内容分析

小野寺孝義

**問題** これまでの多くの研究は身体的魅力が対人行動の多くの諸側面において重要な影響要因であることを明らかにしてきた。特に、身体的に魅力的な女性はより女性的であるとするステレオタイプ<sup>1</sup>で捉えられる傾向があり、よりやさしく親切、あるいは性的に魅力的と知覚されることがわかった。この女性に対する特有のステレオタイプを特に美女ステレオタイプと名付けることにする。

このような身体的魅力の要因は極めて強力であることが社会心理学者の間では常識になりつつある。例えば、Kleck and Rubenstein (1975) は身体的魅力と、それまで対人魅力の重要な要因とされてきた態度の類似性を検討する実験を行っている。結果は実験直後の評定においても、また2～4週間後の評定においても、相手の評価に対して身体的魅力が有意な主効果を示し、態度の類似性はなんらの効果も示さなかったのである。Kleck and Rubensteinはこの結果について身体的魅力の効果が極めて強いため、態度の類似性効果が圧倒されたのではないかと考察している。彼らの実験がフェースツウフェースのより自然な状況のものであったことを考えれば、現実の人間の相互作用の中では身体的魅力が顕著な効果を持つことは明らかである。

Suman and Kureshi (1988) も身体的魅力と態度の類似性を変数に含めた実験を行っている。そこでは性差によっては類似性と魅力に交互作

用が見られるものの、分散分析によるF値の値を検討して見ると、他のどの主効果や交互作用よりも身体的魅力の主効果は圧倒的に大きいのである。Suman and Kureshi 自身以下のように記している。

In real world interactions, of course, physical attractiveness is the most prominent variable to cause attraction and both men and women seem to be strongly influenced by the appearance of others. The stereotype "What-is-beautiful-is-good" operates most strongly in the first impression-formation. (p.237, ll.13-17)

では、なぜこのような強力な対人認知要因を社会心理学者は見逃して来たのだろうか。これについてはBersheid and Hatfield (1974) がAronsonの秀逸なコメントを引用している (p. 158)。それによれば、身体的に魅力的な女性がより他者好かれるというという証拠を見出すこと自体が非民主的に思えるため、研究者はその事実を認めることに心理的な抵抗を感じていた可能性があるという。つまり、一般の人が考える民主的という概念には「人は平等であり、誰でも努力次第で成功を勝ち得る」という思い込みがあるというのである。従って、身体的魅

1) ステレオタイプ(stereotype) : 外的刺激に対する紋切り型で慣習的な反応、もしくは判断のこと。その利点としては外部の情報処理する際に時間や労力の節約となることが挙げられる。一方、場合によっては事実を歪曲し、誤った判断をしたり、偏見につながるようなこともある。偏見との違いは偏見が態度であるのに対し、ステレオタイプは観念であることである。しかし、広義にはステレオタイプも偏見の弱い形態とみなすこともある。

力のように生まれつき規定され、その個人の努力によって変えられない表面的なことにより、その人が社会的に有利になるのには我慢がならない気がするというわけである。実際、自分が身体的に魅力がないと感じている大多数の人間にとって、美人が美人に産まれたというそれだけで得をするというのは納得がいかないことであろう。そして、そのような心理的抵抗を研究者が共有していたとしても不思議はない。Pater (1985) はそのような心理的抵抗が身体的魅力研究に対して無関心や不同意、攻撃という形で典型的に表出されることを示唆している (p. 5)。だが、皮肉なことに心理的抵抗が強い人ほど実は意識的にせよ、無意識的にせよ、外面的な美しさが対人関係で重要なことに気がついていることが多い。むしろ、気がついているからこそ心理的抵抗が強いというべきであろう。

もし、多くの人々が身体的魅力とは単なる皮膚の表面上のことにすぎないとして割り切るならば、美人ステレオタイプは社会的に意味を失うことになるかもしれない<sup>2</sup>。しかし、化粧やファッション、ダイエット、そして美容整形に見られるように現代社会はますます美しさを高く価値づけるようになってきており、人は外見の美しさに無関心ではいられなくなっている。このような状況で、人々はある種の矛盾した態度を持つ可能性が出てくる。外見だけで自分を判断されたくないという気持ちと外見だけで人を判断するべきではないという規範を持ちながら、同時に外見に過度に気を使い、外見で他者を判断している自分に気がつくのである。この二重規範は身体的に魅力がある人物にも向けられている可能性がある。実際、美人を誉め称える多くの言葉やことわざと同時に美人であることをおとしめたり、危険視する言葉も少なくない。例えば、

- 美婦は不祥の器 (美しい女は縁起がよくなり、禍いや不幸を招く)
- 命取りとは美女、命の親とは悪女の異名 (美女はその色香によって男の命を縮め、醜

女はその反対に男に尽くすことによって男の寿命を延ばす)

- 美と愚は好一対 (美人には愚か者が多い) などである。

(小学館編 ことわざ名言の泉より)

このような諺としては英語にも、"Beauty and folly are old companions.", "Beauty time s brains equals a constant." などがある。美男に関して「色男金子と力は無かりけり」というように美男を揶揄するような言葉がある。以上のように身体的魅力に対する二重規範的な態度は、身体的に魅力的な人物に対する両価的な観念を作り出している可能性がある。そしてこのような両価的な態度は特に女性に顕著な可能性がある。なぜなら、化粧やファッションに見られるように他者からの視線をより意識しているのは女性の方だからである。

本研究では身体的に魅力的な人物に対するステレオタイプ反応を吟味し、両価的な態度が存在するか否かを女子短大生を対象に検討するものである。

**方法** 被調査者は京都の女子短期大学生 94 名。質問紙を用い、美女・美人と呼ばれる女性に対して、また美男と呼ばれる男性に対して共通すると考える性格や特性をそれぞれ最大 5 つまで列挙するように求めた。また、それぞれの性格や特性を良い意味で挙げたのか、悪い意味で挙げたのか、あるいは特に良い悪いのない中性的な意味で挙げたのかを 3 段階評定で求めた。

**結果** 美女に関して得られたステレオタイプ反応の総数は 433 個、美男に関しては 409 個であった。内容を整理し、ほぼ共通するものをカテゴリーとしてまとめた。その結果、美女ステレオタイプは 47 のカテゴリーに分けられ、そのカテゴリーに 361 個のステレオタイプ反応が入った。つまり、47 個のカテゴリーで全ステレオタイプ反応の 83.4% が説明できたことになる。

2) このような考え方の根底には美しさが文化、社会的に規定されているとする仮定がある (例えば、Adams and Crossman (1978))。しかし、人が美しさを感じるのには生物学的な根拠があるとする社会生物学的な立場もある (例えば、蔵 (1993))。

美男ステレオタイプについては52個のカテゴリに321個のステレオタイプ反応が入り、78.5%が説明できたことになる。頻度が高いステレオタイプ反応と被調査者総数に対するパーセンテージを示したのが、表1である。

表1 ステレオタイプと  
全人数に対するパーセンテージ

美女ステレオタイプ反応		美男ステレオタイプ反応	
内 容	%	内 容	%
冷 たい	41.49	やさしい	31.91
プライドが高い	30.85	冷 たい	23.40
わがまま	29.79	背が高い	17.02
スタイルがよい	22.34	自意識過剰	17.02
知 的	17.02	自信過剰	15.96
やさしい	17.02	金 持 ち	14.89
おしゅれ	11.70	知 的	12.77

内容的に相反するステレオタイプが生じていることがわかる。例えば、「冷たい」と「やさしい」という正反対の性質が美男・美女いずれに対しても現れている。

次に各被調査者が良い意味でステレオタイプをあげたのか、悪い意味、あるいは中性的な意

味であげたのかについて吟味してみよう。各被調査者は最大5つのステレオタイプを美男・美女についてあげ、それぞれの意味内容について3段階で評定した。良い意味なら正として+1点、悪い意味なら負として-1点、中性的なら0点を割り当てた。従い、ステレオタイプを5つ挙げ、それら全てが良い意味を持つものであった被調査者の場合には合計+5点になる。同様に全てに悪い意味をあげた場合には-5点になる。美男ステレオタイプに関しては1つもステレオタイプ反応が生じなかった被調査者が1名いたので、この1名は分析から除外した。図1はステレオタイプ反応への正負反応合計を棒グラフにしたものである。

美女ステレオタイプ反応に関しては平均が0.096、標準偏差が2.229であった。分布は0を中心として幾分歪んだ正規的な分布になっている。一方、美男ステレオタイプ反応では平均が0.226、標準偏差が2.663であり、分布の形状は正規分布とは明らかに異なっている。従って、ステレオタイプの意味の正負に関して美女への反応と美男への反応は同じではないことが明らかである。想起されるステレオタイプ反応

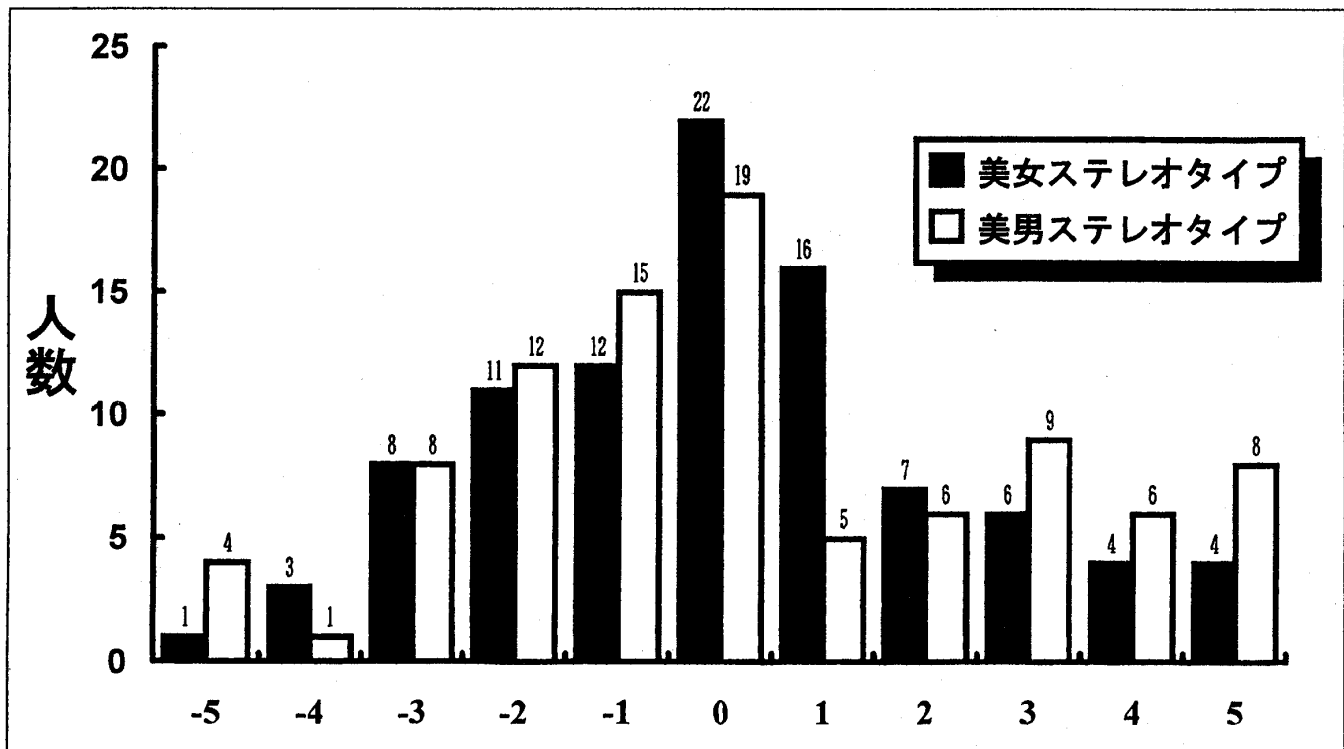


図1 ステレオタイプ反応への正負反応合計

の正負がランダムであると仮定すると、分布は0を中心として両極に向かいゆるやかな曲線を描くことになる。美女ステレオタイプへの反応はそれに近い。言い換えれば正反応、負反応が各被調査者についてはほぼ同比率で観察されていることがわかる。それに対して美男ステレオタイプでは、美女ステレオタイプよりも標準偏差が高く、散らばりが大きい。特に分布の裾での頻度が高い。このことから、美男ステレオタイプに関しては正負での反応が偏っていることがわかる。特に正反応の顕著さは美男に関してポジティブなステレオタイプばかりを持つ被調査者が少なくないことを示している。

これまでは個々に美女ステレオタイプ反応と美男ステレオタイプ反応を検討してきた。では、両者の関連はどうなるのであろうか？ 美女にある傾向をもってステレオタイプ反応する被調査者が、美男に対してもなんらかの傾向を示すことはないであろうか。これを検討するために美女へのステレオタイプ正負反応と美男へのステレオタイプ正負反応をクロスしたものが、表2である。

表2で気がつくことは対角線上を中心に、この表が対称形 (symmetry) になっているのではないかということである。そこでこの対称形仮説を対数線形モデル<sup>3</sup>を用いて検討してみた。具体的には対角線を境にして上三角行列と下三角行列を生成し、対数線形モデルで適合度検定

表2 美男・美女ステレオタイプの関連表  
美女ステレオタイプ反応

美男ステレオタイプ反応	美女ステレオタイプ反応			合計
	ネガティブ反応	中性反応	ポジティブ反応	
ネガティブ反応	23 (14.6)	6 (6.9)	5 (12.4)	34 (36.6)
中性反応	6 (9.5)	8 (4.5)	8 (8.0)	22 (23.7)
ポジティブ反応	11 (15.9)	5 (7.6)	21 (13.5)	37 (39.8)
合計	40 (43.0)	19 (20.4)	34 (36.6)	93 (100)

(セルのカッコ内は期待値、合計セルのカッコ内はパーセンテージ；欠損値により1名分のデータが分析処理から除かれている)

を行った。結果は自由度3で尤度比統計量は3.00453,  $p=.391$  であり、対称形モデルは棄却されなかった。つまり、美女にポジティブなステレオタイプ反応をする被調査者は美男にもポジティブな反応をし、美女にネガティブな反応をする被調査者は美男にもネガティブな反応をする傾向があるということである。

次に、美男・美女ステレオタイプとステレオタイプ想起の順序と正負反応の間にはなんらかの規則性はないであろうか？ これらを検討するために美男・美女ステレオタイプ、ステレオタイプ想起順序、ステレオタイプの正負反応に関して  $2 \times 5 \times 3$  の階層対数線形モデルによる分析を行った。後退消去法をもとにデータを良く説明するモデルを探索した。尤度比統計量と自由度を考慮した結果、ステレオタイプ正負反応の主効果項、及びステレオタイプ想起順序の主効果項の2つの要素を持つモデルが選ばれた。モデルの自由度は23、尤度比統計量は23.99、有意水準は  $p=4.04$  であった。美男・美女ステレオタイプは主効果としても交互作用としても有効ではなかったもので、美女ステレオタイプにせよ、美男ステレオタイプにせよ、その頻度はステレオタイプの正負と順序により規定されていることになる。そこで美男・美女のステレオタイプを併合し、グラフで示したのが、図2である。

図2では見やすくする都合上中性的な反応を

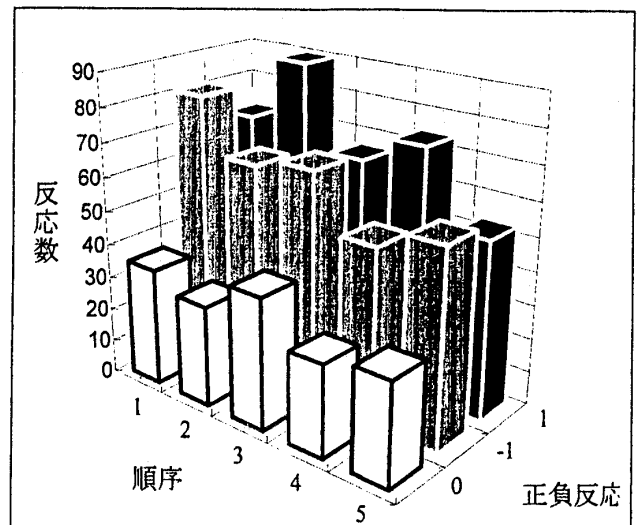


図2

3) 結果の分析にあたっては統計解析パッケージ SPSS/PC+ V.3.0J, 及び SPSS for Windows Release 5.0 を利用した。

一番手前に、次に正反応、一番後に負反応をそれぞれ0、-1、1と示している。中性反応は数が少なく、ほぼ一定していることがわかる。ステレオタイプ正負反応の主効果については主に中性反応が、正負反応よりはるかに少ない結果と考えることができる。順序の主効果は正反応と負反応の数の多さが交互に増減している結果と見なすことができる。

**考察** 本研究の結果は、両価的なステレオタイプが美男・美女双方に対して存在することを示している。「やさしい」という反応と同時に「冷たい」という正反対の正負反応が観察されている。しかし、そこで観察されたステレオタイプの正負反応は美男に向けられたものと、美女に向けられたものでは違いが見られた。図1に見られるように、特に美男に関しては反応分布が歪んでおり、散らばりも大きいので、かなり個人差が大きいことが示唆される。美男に対する思い込みが激しい結果と解釈することもできよう。これは被調査者が全て若い年頃の女性であったことと無関係ではないだろう。同性に対しては良い点も悪い点も見出すが、異性に対しては良い点のみ、あるいは悪い点のみにしか目がいかない個人が存在するということである。

ステレオタイプの内容自体に関しては表1に見られるようにかなり個人間で共通することがわかった。

美男ステレオタイプ反応と美女ステレオタイプ反応の関連については対称形仮説が当てはまったので、一方にポジティブなステレオタイプ反応をする人は他方にもポジティブに反応する傾向が、また一方にネガティブに反応する人は他方にもネガティブに反応する傾向があると言える。このような傾向が美男・美女という対象以外に対しても観察されるかどうかはわからないが、もしそうであれば、ステレオタイプ形成過程で性格やある種の帰属様式などの要因が個人差をつくり出している可能性がある。例えば、孤独感が強い人は否定的な人間観を持ち、他者をネガティブにみる傾向があることが知られている (Jones, Sansone, Helm, 1983; Jones,

Freeman, Goswick, 1981)。否定的な帰属様式を持ち、他者に受容されていないと感じる傾向が強い人は他者一般に対しても好意的なステレオタイプを持ってはいないであろう。身体的魅力に関するステレオタイプと個人属性の関連は今後の研究課題と言えよう。

次に美男・美女ステレオタイプとステレオタイプの正負反応、その想起順序との関連について考察してみよう。対数線形モデルによる分析では美男ステレオタイプ反応と美女ステレオタイプ反応になんらの主効果も交互作用も見い出せなかった。最も重要なのはステレオタイプの正負反応であった。ステレオタイプ正負反応の主効果は中性的反応が正反応や負反応に比べてかなり少ないことによるものである。これは、想起されるステレオタイプが美男や美女という複雑で両価的な感情を引き起こしている対象であることを考慮すれば自然なことと思える。一方、ステレオタイプ想起順序の主効果の解釈はそれほど簡単ではない。中性的な反応がほぼ一定の水準を保っている以上、正反応か負反応のいずれかが多ければ、他方が少なくなるのは当たり前とも考えられる。一見、正反応と負反応が交互に生じているように見えるが、適切な解釈ができない以上、今後の研究での再現性を待つ他はない。仮に同様な傾向が今後の研究でも確認されれば、人間がある対象についてステレオタイプを想起する際の思考様式を知る手掛りになるかもしれない。

## 文献

- Adams, G. R., Crossman, S. M. (1978) Physical attractiveness: A cultural imperative. New York: Libra Publishers, Inc.
- Berscheid, E. (1985) Interpersonal attraction. In G. Lindzey., E. Aronson (Eds.), *The handbook of social psychology*. Vol.2. 3th ed. New York: Random house.
- Berscheid, E., Walster (Hatfield), E. (1974) Physical Attractiveness, In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol.7). New York: Academic Press.
- Bull, R., Rumsey, N. (1988) The social psychology of facial appearance. New York: Springer-Verlag Inc.
- Cash, T. F., Janda, L. H. (1984) The eye of the beholder. *Psychology Today*, 18(2), December. 46-52.
- Dion, K., Berscheid, E., Walster (Hatfield), E. (1972) What is beautiful is good. *Journal of Personality and Social Psychology*, 24, 285-290.
- Jones, W. H., Sansone, C., Helm, B. (1983) Loneliness and interpersonal judgements. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 9, 437-441.
- Jones, W. H., Freeman, J. A., Goswick, R. A. (1981) The persistence of loneliness: Self and other determinants. *Journal of Personality*, 49, 27-48.
- Kleck, R. E., Rubenstein, C. (1975) Physical attractiveness, perceived attitude similarity, and interpersonal attraction in an opposite-sex encounter. *Journal of Personality and Social Psychology*, 31(1), 107-114.
- 蔵琢也 (1993) 美しさをめぐる進化論 - 容貌の社会生物学 - 勁草書房.
- Marija J. Norusis/SPSS Inc. (1990) SPSS/PC + Advanced Statistics for the IBM PC/XT/AT and PS/2.
- 松井豊 (1993) 恋ごろの心理 サイエンス社.
- 小野寺孝義 (1989) 美人タイプと美人ステレオタイプの研究, 東海女子短期大学紀要, 15, 113-122.
- Patzer, G. L. (1985) The physical attractiveness phenomena. In E. Aronson. (Ed.), *Perspectives in social psychology*. New York: Plenum Press.
- 小学館編 1990 電子ブック版 ことわざ名言の泉 小学館.
- Suman, H. C., Kureshi, A. (1988) Interpersonal attraction as a function of physical attractiveness, personality similarity - dissimilarity, and reciprocity. *Psychologia*, 31, 234-238.

児童教育学科 初等教育 心理

## ABSTRACT

The content of the attractiveness stereotypes was investigated. Data from 94 female college undergraduates show that there is the double standard in the subjects' stereotypes for the physically attractive persons.

While they perceived the attractive persons being warm and tender, they perceived them being cold at the same time. Categorical analysis using loglinear model indicated that subjects who have the negative or the positive view to the attractive women tended to respond to the attractive men same way.

Findings support the view that women have the complex and contradictive attitude to the physically attractive persons.